

高齢者のボランティア活動（その２） ——シニア・コンパニオン・プログラム——

Vol. 4, No. 56 August 12, 1999

Health and Welfare Department

伊原和人 (Kazuhito Ihara)

天池麻由美 (Mayumi Amaike)

「高齢者のボランティア活動（その１）」では、高齢ボランティアが、地域において援助を必要とする子供たちを対象に活動を行うフォスター・グランドペアレント・プログラムについて紹介したが、今回は、地域の虚弱高齢者などを毎日訪問し、散歩に付き合ったり、主治医の受診に付き添ったりと、よき「友人（仲間）」としてその生活を支える役割を果たすシニア・コンパニオン・プログラムについてレポートしたい。

1 「友人以上、家政婦未満」のシニア・コンパニオン

「彼女はすばらしい（marvelous）。かけがえのない人だ」。ジョセフィン・モータラロさんは、孫たちの写真に囲まれた自宅の居間で、傍らにいるアルマ・ファットさんをご紹介した。

モータラロさんは 83 歳。夫は 9 年前に死亡、以降、生まれ育ったマンハッタンの子ヤイナタウン近くのアパートで一人暮らしを続けている。糖尿病による様々な合併症の影響もあってペースメーカーを装着しているほか、歩行には杖が欠かせず、一人で外出というわけにはいかない。二人の子供は、フロリダ州とニュージャージー州に住んでおり、毎日のように電話を掛けて寄こすというが、日々の生活の世話を期待することはできない。幸い自分で食事を作ったり簡単な掃除程度はできるので、食料品の買物など自分でできないことだけを近くに住む 86 歳の姉に頼み、一人暮らしを継続している。

こんなモータラロさんを月曜から金曜までの午前中の 2 時間、毎日訪問し、朝食を共にしたり、散歩に付き合ったり、あるいは主治医の受診に付き添ったりと「友人以上、家政婦未満」の付き合いをしているのがファットさん（72 歳）。ファットさんは、シニア・コンパニオンと呼ばれる高齢ボランティア。ニューヨーク市内の非営利団体（ヘンリー・ストリート・セツルメント）が運営するシニア・コンパニオン・プログラムに参加し、モータラロさんのコンパニオン（仲間・友人）として、その一人暮らしを支えている。

2 シニア・コンパニオン・プログラムとは

シニア・コンパニオン・プログラムとは、連邦政府の特殊法人であるナショナル・サービス公社が運営し資金を提供している「全米高齢者協力隊プログラム」の三つのプログラム（別表参照）のうちの一つ（以前ご紹介したフォスター・グランドペアレント・

プログラムもその一つ)。全米各地の自治体や非営利団体がナショナル・サービス公社から資金の提供を受け、実際の事業を行っている。

このシニア・コンパニオン・プログラムでは、ボランティアの高齢者が、地域において独力では生活を継続することが困難な高齢者や障害者などを対象に、その話し相手となったり(精神的なサポート)、家事や受診時の付き添いなど日常生活の援助を行っている。あくまでも「コンパニオン(仲間・友人)」であるので、プロのホームヘルパーが行うような介護や家事援助といった「仕事」を行うわけではない。ニューヨーク市内でこの事業を行っているヘンリー・ストリート・セツルメントが発行しているパンフレットによれば、その主な活動内容は以下のとおり。

- ・ 親しい友人として付き合うこと
- ・ 簡単な食料品の買物や食事の準備
- ・ 医療機関受診時の付添い
- ・ 図書館の本や CD の貸し借り
- ・ 目の見えない者のための本の読み聞かせ、散歩の付添い、手紙の代筆
- ・ 他のサービス提供機関との連絡調整

参加条件は、フォスター・グランドペアレント・プログラムと同様で、60 歳以上で健康であること、週 20 時間以上活動できること、低所得者であること¹となっている。ヘンリー・ストリート・セツルメントの場合には、さらに事前に 40 時間の研修を受けることとされている。

一方、活動に参加した高齢者については、1 時間につき 2 ドル 55 セント(約 300 円)のスタイペンドと呼ばれる報酬、そして交通費が支給される。

現在、このシニア・コンパニオン・プログラムには、全米で約 12,000 人のシニアコンパニオンが参加し、約 37,000 人の高齢者を対象に活動を行っている。ヘンリー・ストリート・セツルメントの場合には、ニューヨーク市内の 18 ヶ所を拠点として、112 人のシニア・コンパニオンが活躍している。

3 自分の体が動かなくなるまで続けたい

ファットさんはプエルトリコ生まれ。18 歳の時に米国に渡ってきた。過去、様々な仕事をしてきたが、ホームヘルパーなど高齢者介護の仕事も通算 30 年以上になるという。現在、中国人の夫とふたり暮らしであるが、毎日、家の中に閉じこもっていても退屈なので、3 年前に友人に紹介されて知ったシニア・コンパニオン・プログラムに参加した。

モーテラロさんを訪問するようになって約 1 年。最初、モーテラロさんに出会った時は、腰の手術をしたばかりの時点で、浮腫もあり体重も現在より 5 割程度も多く、衰弱した感じであったという。しかし、この 1 年の間に見違えるように元気が良くなり、天気の良い日には散歩にも出れるようになったとのこと。

ファットさんは、このプログラムのほか、時間に余裕のある時には、近くのシニアセンター(老人福祉センター)でボランティアをしているとのことだが、何よりもこのプ

¹ 年間所得が単身者の場合には 10,870 ドル(約 130 万円) 夫婦世帯の場合には 14,650 ドル(約 170 万円) となっている。

プログラムが気に入っているという。「何よりも相手の高齢者と友達になれるし、その人のために自分が役に立つことができることは大きな喜び」とのこと。何歳まで続けるつもりかと尋ねたところ、「自分の体が思うように動かなくなるまでは続けたい」との返事が返ってきた。

4 日本でも普及が望まれる高齢者相互の扶助システム

今後、日本も米国も共に本格的な高齢社会を迎える。こうした状況にあって、シニア・コンパニオン・プログラムのよう、時間と健康に恵まれた高齢者が、援助を必要とする高齢者を支える高齢者世代内の相互扶助ともいえる活動は一層重要になってこよう。

それは単に急速に増加する高齢者に対して、これを支える現役世代の人手が足りないというような人口構成や労働力の問題があるからというだけではない。そもそも高齢者には共通の歴史や境遇を経てきた者同士でしか分かり合えない多くの「感性」や「時間の流れ」といったものがある。さらに、高齢者が高齢者を支援するという活動は、ファットさん自身が語っているように、サポートを受ける高齢者はもちろんのこと、ボランティアとなる高齢者自身にとっても、他者の役に立っているといった生きる手ごたえ、生きがいといったかけがえのない価値をもたらしてくれる。

既に、日本でも各地でこうしたシステムの萌芽が見られ始めているが（そもそも過疎化の進む郡部では高齢者の相互扶助で地域社会が成り立っているところも多い）、今後は、こうした高齢者同士の相互扶助システムを、意識的に制度化していく作業が必要になってこよう。報酬を支給すべきかどうか、高齢ボランティアにどのような役割を担ってもらえるかなど検討が必要な問題は多いが、それぞれの地域の事情に応じたプログラムが考案されるべきだと思う。

ただこのシニア・コンパニオン・プログラムの実例を見てもわかるように、大事なことは、あくまでも高齢ボランティアは、「コンパニオン（友人・仲間）」だという点である。高齢ボランティアの役割は、プロのホームヘルパーがするように介護や家事援助の「仕事」をすることではない。援助を必要とする高齢者の友人（仲間）として、友人としてできること、傍にいたる存在として手を貸すことなのである。² したがって、介護などの負担の大きな仕事、いいかえれば本来、プロが行うべきことは、高齢ボランティアの活動の対象外といってもよいであろう。

しばしば、高齢者のボランティアを介護の担い手として活用すべきといった論調の意見を目にするが、介護がボランティアでできると考えることに無理がある。そもそも長期にわたる介護がボランティアのできるのであれば、介護問題がこんなに深刻化するま

² しかし、実際の事業運営に当たって、こうした趣旨が正しく理解されない場合もあるようだ。シニア・コンパニオンには、小額とはいえ報酬が支払われることもあって、支援を受ける高齢者自身が、コンパニオンを「家政婦さん」と勘違いしてしまうケースがあるという。筆者が訪問したモータラロさん自身も「お隣は寝たきりなのに、ファットさんのようないい家政婦もおらず、とても気の毒だ」と語っていたように、ファットさんのことを市役所が派遣してくれる無料の「家政婦」と誤解している節が見受けられた。また、ファットさんの方も、モータラロさんが高齢だということもあって、あえてこうした「誤解」を解こうとはしていないようであった。

とはないはずである。

援助を必要とする高齢者は、何も介護や家事援助だけが必要なのではない。健康を失い、あるいは連れ合いや友人を失い、日々、孤独に耐える中で、「友人・仲間」を必要としている者は大変多い。おそらく、こうしたニーズの大きさは、介護や家事援助に対するニーズと同程度、あるいはそれ以上ではないだろうか。その上、今後、高齢化が一層進む中で、こうしたニーズを現役世代を中心とするプロフェッショナル（職業人）によってカバーすることは到底不可能でもある。

日本においても、介護や家事援助といった目に見える高齢者のニーズの周辺に存在するこうした無形のニーズに応えるためにも、シニア・コンパニオン・プログラムのような活動が広く普及することを期待したい。

全米高齢者協力隊(National Senior Service Corps Programs)の概要

連邦政府の特殊法人であるナショナル・サービス公社(Corporation for National Service)が、連邦政府補助金や企業寄付金等を財源として運営。「高齢ボランティアは地域社会のニーズを満たす貴重な人的資源である」との考えの下に、以下の3つのプログラムから構成。

Foster Grandparent Program(特別な援助を必要とする子供たちを対象としたプログラム)

ボランティアの高齢者が、虐待等のために精神的に問題を抱える子供に対し、情緒的なサポートを行ったり、文盲の子供に対し読み書きを教えたり、素行不良な少年や未成年で母親となった少女の相談相手となる。

Senior Companion Program(援助を必要とする高齢者等を対象としたプログラム)

ボランティアの高齢者が、地域において独力では生活を継続することが困難な高齢者や障害者等を対象に、精神的なサポートのほか、家事や受診時の付き添いなどの援助を行う。

及び のプログラムは、その参加条件が一定の所得以下であることされており、活動参加者には1時間につき2ドル55セント(約300円)のスタイペンド(stipend)と呼ばれる報酬が支給される。

Retired and Senior Volunteer Program(地域貢献プログラム)

高齢者がボランティア活動を通じて、地域社会に参画し、貢献することを促進することを目的としたプログラム。活動内容は、子供たちに国語や算数等の勉強を教えたり、低所得者向け住宅の建設を手伝ったり、公共花壇の手入れをしたりと多種多様。